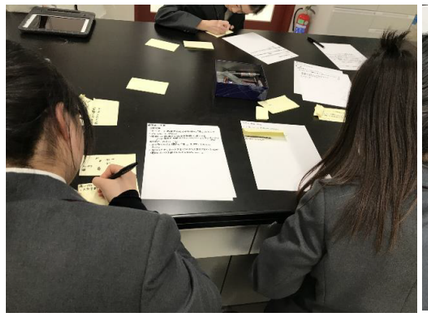
市民研通信

2019年 3月 通巻195号 49



市民科学研究室が作成したウェブ教育教材「キッズ・ラジスター―ラジオ局作りで地域社会と情報技術を学ぼう」の一部を活用したワークショップから

市民研 NPO法人 市民科学研究室

Event 市民科学交流会

3月31日（日）第1回「お酒とうまく楽しく付き合うために」

by 市民科学研究室・食の総合科学研究会

市民研の活動や市民研で活動しているメンバーのことを知ってもらうために、スタッフや会員のなかから毎回3人ほどの話題提供者を決めて、興味深いお話をしてもらい（1 人10分ほど）、市民研を初めて訪れる人も交えて、楽しく語り合う場です。第1回は、「食の総合科学研究会」の担当で、この時期に合わせたお花見の散歩と歓談の機会となります。どなたでも参加できますので、ふるってお申し込みください。

●2019年3月31日（日）11:00-14:30

●湯島聖堂の横の「お茶の水公園」入口に11:00に集合

（住所は東京都文京区湯島1丁目4。湯島聖堂と神田明神を巡り、その後、徒歩で5分のところにある市民研事務所に移動します。）

●定員：15名（事前申し込みが必要）

●参加費：1000円（ただし、皆で少しずつつまめるような酒の肴（さかな：ツマミ、アテとも言いますね）となる1品をご持参ください。なお、話題提供者からはその話題に関連したお酒が提供されます。）

●話題提供者

①「飲酒年齢の線引きは，なぜ20歳なのか」（小野田美都江）

②「ベルギービール　基本のき」（菊池亨子）

③「科学知を活用した安旨ワインの選び方・楽しみ方」（上田昌文）

Event 共催ワークショップ

3月10日（日）思い返してみよう、3.11のこと

原発事故避難体験者を交えて語り合う、市民による原子力防災のあり方

東日本大震災から8年が経ち、9年目を迎えようとするその直前の日に、NPO法人市民科学研究室が地元文京区の団体「ご近所de BOSAI 3.11から未来へ！」と組んで防災に関するワークショップを開催します。

それぞれが体験した2011年3月11日のことを思い返しつつ、特に、福島第一原子力発電所事故によって私たちがどう右往左往させられ、どう対処しようとしてきたかを語り合い、将来の原子力災害への備えがどうあらねばならないかを思い描きます。原発事故による避難を体験した方と、放射線の問題に市民の立場から取り組んできた講師とのやり取りも含めて、参加者皆で意見交換ができるように工夫されたワークショップです。

●2019年3月10日（日）15:00～17:00（13:30開場）

●講師：上田昌文（市民科学研究室・代表理事）

●場所：光源寺　蓮華堂（文京区向丘2-38-22）

●参加費：300円（冊子『みらいへのとびら』＋原子力防災に関する資料、お茶＋おやつ代として）

●ゲスト：

梅田叡一さん

（福島県南相馬市原町高等学校出身、横浜市在住）

土谷利之さん

（福島県浪江町出身、調布市在住）

●事前予約が必須です。

またお子様連れでのご参加も大丈夫です。

●共催：ご近所de BOSAI 3.11から未来へ！

NPO法人市民科学研究室

Essay 市民研理事たちによる読み切りリレーエッセイ　第5回　橋本正明

私たち市民ができることは

今年もはや2ヶ月が経過した。

昨年は私にとって実家との繋がりを今までにないほど深める一年となった。突然の父の余命宣告、想い出の海を見に行く最後の家族旅行の計画、その旅行の前々日に発生した大地震とブラックアウト、涙を呑んで旅行を諦め、想い出の海を二度と見ることなく失意のうちに間も無く他界した父、そしてその父との最期の別れ。何度も帰省を繰り返し色々な手続きや片付けを行うなかで、気が付いたことがいくつかある。

先ず、行政書士などの専門家のアドバイスは非常に参考になるものだということ。次に、普段とかくいろいろ言われがちな役所の職員の方々も、いざという時にはとても頼りになる存在であるということ。そして言わば「身内」にあたる人たちに頼らなければ自分一人では何も成し得なかったということ、である。

だが今、巷ではかつてないほど、公的機関の信頼性が根底から相次いで覆されている。

科学の世界もまた例外ではないだろう。その信頼へのゆらぎは、地球気候変動やマイクロプラスチック、ゲノム編集、AIなど、科学技術の進歩が必ずしも全て正の効果を発揮するとは限らないということにも由来しているように思える。

こうした状況において、得てして私たちは単純な正邪の二元論に陥り、対立する相手との間に「壁」をつくるという愚を犯しがちだ。大切なのは、多種多様な意見や立場を尊重しつつ、「最適解」を探ることではないか。政治経済のみならず科学の世界に於いてもまた。

市民一人ひとりが、誤った道に進む気配を察知したらお互いに声を上げ、注意を喚起し、行動を起こすこと。それがたとえ小さな気付きであってもその声に呼応するたくさんの声があるかも知れない。今年は皆さんにどのような気付きをお伝えできるだろう。そして皆さんからどんな気付きをいただけるだろうか。

Information

「私のおすすめ3作品　2018年」ホームページに掲載しています

毎年年末になると、会員の皆さんから**「私のおすすめ3作品」**という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画やTV番組、聴いたCDや足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい3作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただいています。2018年の原稿が集まりました。ホームページに掲載しておりますので、お読みいただければと思います。

★ご寄稿くださった方々

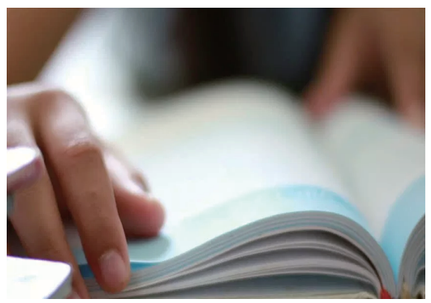
・杉野実さん　・吉岡寛二さん

・橋本正明さん　・白井基夫さん

・孝本乃子さん　・中田哲也さん

・瀬川嘉之さん　・角田季美枝さん

・上村光弘さん　・上田昌文さん



また、市民研ホームページ上では、**「市民研サーチライト」**と題して、日々の活動のなかで出会ったネット上の有用な情報や書籍や論文を1日・1篇で紹介しています。皆様さんからものホームページ上の投稿フォームを用いてぜひいろいろな情報をお寄せいただければと思います。

市民研へのご入会／ご寄付のご案内

市民研の活動は会員となってくださる方々の会費やご寄付によって支えられています。

市民研の活動にご賛同いただける方、支援をしていただける方には、ご入会やご寄付をお願いいたします。

ご送金・ご入会・ご寄付につきましては以下のやり方でお願いしています。

●100円単位の送金　100円単位のカンパや少額の送金（郵送費など）にご利用ください。

市民科学研究室の新しいホームページのメインメニューに「ご支援のお願い」があります。そこから**「市民研オンラインショップ」**のサイトにつながります。そのなかに、「一口100円ご送金」のカートがありますので、ご利用ください。

●会員登録　年会費を送金して次のいずれかの会員になることができます。

★レイチェル会員……年会費　10,000円　（総会における議決権あり）

★ダーウィン会員……年会費　3,000円

★ジュニア会員……年会費　1,000円（「自主研究サポート」（※）の特典あり）

※学校の教科学習以外で自分で自主的にすすめる調査や研究を、市民研の都合に合わせて相談の時間を設け、サポートする

会員になると、以下のサービスを受けることができます。

1. 隔月の機関誌『市民研通信』の送付（会員は全文アクセス可、非会員には有料の記事論文あり）
2. 市民研メーリングリストへの全会員の登録
3. 市民研の各種研究会への参加（skype参加を含む）
4. 市民研主催のイベントで参加費が半額になりかつ同伴者割引も
5. 市民研が刊行した出版物の寄贈（レイチェル会員のみ）
6. 会員間講師派遣制度の利用（この内容についてはホームページの該当ページを参照のこと）
7. 市民研主催の市民科学講座・各種イベント・研究会での配布資料、市民研の代表や理事メンバーらが講師として招かれた講演などの配布資料のうち、公開可能なものから精選して送付
8. 市民科学研究室所蔵の書籍・文献資料や映像資料の借り出し（期限1ヶ月）

●ご寄付　一口1,000円から受け付けております。

ご送金の方法は以下のいずれかでお願い致します。

郵便振替……口座加入者名：市民科学　振替口座番号：00160－4－608503

オンライン決済……市民研ホームページの「市民研オンラインショップ」から

NPO法人 市民科学研究室　〒113-0034 東京都文京区湯島 2-14-9 角田ビル2F
Tel: 03-5834-8328　Email: renraku@shiminkagaku.org

Report

サイエンスカフェ＠千里公民館「ゲームで生活習慣病を防ぐ!?」

つなぐ人たちの働き方シリーズ #3　「科学技術と社会をつなぐ仕事を創る」

2018年12月18日（火）、千里公民館において、サイエンスカフェ「ゲームで生活習慣病を防ぐ!?～みせたくない自分を“仮想の自分”でみせるコミュニケーション手法が持つ力～」が開催されました。 このサイエンスカフェは、千里公民館とSTiPS、大阪大学COデザインセンターが共同で開催したものです。 参加者は18人（大阪大学や豊中市の関係者を除く）で、千里公民館の近くにお住まいの方だけでなく、豊中市外から足を運んでくださった方もいました。 市民研の開発した「ネゴパト」を市民研代表の上田がファシリテータを務めて実施しました。

また同時の午後、はやり上田が講師となって、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」第3回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催）。 授業を履修している学生や大阪大学教職員に加えて、学外からの参加者など計18人が集まりました。

ともに、「公共圏における科学技術政策」に関する研究会(STiPS Handai研究会)のサイトに報告が掲載されておりますので、お読みいただければと思います。

Article

瀬川嘉之（市民科学研究室・低線量被曝研究会）

日本政府と日本の専門家の欺瞞ぶりを体現する放射線審議会

はじめに

2019年1月に放射線審議会が「東京電力福島第一原子力発電所事故の教訓を踏まえた緊急時被ばく状況及び現存被ばく状況における放射線障害防止に係る技術的基準の策定の考え方について」（以下「教訓を踏まえた考え方」）をまとめています。東京電力福島第一原子力発電所事故（以下「東電福島原発事故」）において日本政府が出した食品や空間線量率といった放射線障害防止あるいは放射線防護の技術的基準を評価し、今後の対応の前提にもなる考え方です。

避難指示が出された区域内外から何万人も避難しているにもかかわらず、日本政府が住宅提供を次々に打ち切っている現状について、放射線審議会は審議することなく追認しています。放射線被ばくを避け、被ばく線量を低減して防護をするための避難です。国際放射線防護委員会（ICRP）に依拠する放射線審議会も、防護の前提として累積100ミリシーベルトを下回る低線量の影響は確率的で安全なしきい線量がなく線量に比例して過剰なリスクが増加するものとしています。原発周辺では法令上、線量限度の年間1ミリシーベルトを超えるおそれのある区域に居住できないのも防護のためです。管理目標値は年間0.05ミリシーベルト、規制の対象としない免除やクリアランスのレベルは年間0.01ミリシーベルトです。事故発生とともに日本政府は、年間20ミリシーベルトまで居住可能としてしまいました。避難指示がなされなかった地域にしても、出された避難指示を解除して居住可能にしたとしても、防護のため避難継続ができる施策が十全になされなければ、差別的な法令や政策と言わざるをえません。

国連から日本政府に向けての勧告

2015年に国際連合が採択した「持続可能な開発目標（SDGs）」には目標16.b として「持続可能な開発のための非差別的な法規及び政策を推進し、実施する」とあります。昨年から今年にかけて国連から日本政府に対し幾つもの勧告がありました。放射線審議会は国連からの指摘にまったく触れず、避難について直接検討することなく「教訓を踏まえた考え方」をまとめています。

国連人権理事会ではUPR(普遍的定期的審査)として4年に1度すべての国連加盟国の人権状況を審査しています。昨年は日本政府に対し、オーストリア、ポルトガル、ドイツ、メキシコの4ヶ国から勧告があり、3月の本会合で採択されました。いずれも東電福島事故における避難者や住民の住居や健康に関する権利を守るよう求めています。特にドイツの勧告では、年間1ミリシーベルトの線量限度に戻すことを明記しています。

【続きは市民研HPにて】

Report

柿原 泰（市民科学研究室・低線量被曝研究会）

講座報告：東電原発裁判から見えてきたこと ～未公開だった検察資料を中心に～

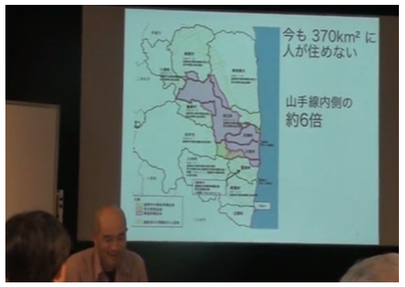
●講座の紹介

2018年10月6日、市民科学講座Aコースとして、添田孝史さんを講師に迎え、「東電原発裁判から見えてきたこと」と題する講座を光塾COMMON CONTACT並木町にて開催しました（講座の案内はこちら、案内チラシはこちらを参照）。2011年の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故をめぐって、全国各地で国や東電の責任を問う裁判が数多く行なわれています。2017年6月には、東京電力の刑事責任を問う裁判の公判も始まって、講座のあった2018年10月には、被告人質問（東電の勝俣元会長、武黒元副社長、武藤元副社長）が始まろうとしていた時期にあたります（10月16日の第30回公判から被告人質問が始まりました）。講師の添田さんは、岩波新書『東電原発裁判』の著者であり、この東電原発刑事裁判をずっと傍聴・取材を続けられています。講座では、原発事故と地震・津波の問題の基本的なことから解説していただくとともに、それまではっきりとは見えていなかったことで裁判のなかで明らかになってきたことは何か、それでもまだ見えてこないことは何か、などについて、最新の情報も交えながら、講演をしていただきました。

●講師の紹介

講師の添田孝史さんについて簡単に紹介します。大阪大学の大学院で生物物理を専攻した後、朝日新聞社で科学医療分野を中心に、記者やデスクとして勤められました。2011年に退社され、フリーの科学ジャーナリストとして活躍されています。東電原発事故に関しては、国会事故調査委員会の協力調査員として津波分野の調査を担当され、雑誌『AERA』などに多数の記事を寄稿され、岩波新書『原発と大津波――警告を葬った人々』も出されています。

市民科学研究室との関わりでは、2012～14年度に東大との共同プロジェクト（原子力施設の地震・津波リスクおよび放射線の健康リスクに関する専門家と市民のための熟議の社会実験研究）を行なっていた際、運営委員をしていただきました。



【続きは市民研HPにて】

Report

瀬野豪志（NPO 法人市民科学研究室・理事）

講座報告：災害のときのラジオ コミュニティのための番組をいかにつくるか

音声を聴きながらおしゃべりをする、ラジオ番組

市民科学研究室では、レコードや放送などの録音資料を聴きながら「音響技術」と「社会」「文化」の関わりについておしゃべりをする「蘇音カフェ」というイベント（十一人劇場）を開催しています。

昨年の11月23日に開催した、市民科学講座「災害のときのラジオ　コミュニティのための番組をいかにつくるか」は、「蘇音カフェ」と同様に、音声を聴きながらおしゃべりをするスタイルで、音響技術についての公開講座として実施しました。 日本における「コミュニティFM」というラジオ放送について、ラジオ番組の形式で、ラジオに詳しいゲストと「トーク」を進めていき、その舞台をコミュニティFMの放送局のスタジオのように見えるようにして、客席のみなさんにも「ハガキ」の投稿をうながして「番組」に参加してもらうという、模擬的なラジオ番組をやるようなトークイベントでしたので、「市民科学講座」としては一風変わった趣向だったかもしれません。

ラジオ番組の形式で進められたラジオについての「トーク」は、コミュニティFMとはどういうものなのかという話から入り、コミュニティFMについての貴重な経験談、地域色の豊かなエピソード、震災のときにラジオで起きていたことがたくさん紹介されることによって、日本のコミュニティFMの歴史的な経緯や、これまでのラジオの歴史についての話が絡み合い、とても有意義な内容になりました。 今回の講座のゲストである佐々木健二さんと長崎励朗さんの親しみやすい語り口のおかげで「トーク」そのものが面白いものになり、本当に「ラジオの番組」をやっているかのようでした。 初めて番組をやることになった「素人のパーソナリティ」としても、とても楽しい時間でした。 あとになって気づくのは遅いかもしれませんが、「市民科学講座」でこのようなことをしてよかったのかと、少し心配になったくらいです。……

【続きは市民研ホームページにて】

Report

講座報告：DIYバイオ ―可能性と課題

はじめに

DIYバイオ(Do-it-yourself biology)によって、自宅で手軽に生命工学に関する実験ができるようになりつつあります。 高価な装置の代わりに身の回りにある家電を使ったり、最先端の論文が誰でも読めるようになったりすることで、誰もが実験できます。

しかし、具体的にどのような方法で行えるのでしょうか？

どんな人がどのような目的で実験をしているのでしょうか？

そして、どのような課題があるのでしょうか？

2019年2月2日、実際にDIYバイオ実験をされている東京大学大学院総合文化研究科博士課程の田中雄喜さんをお招きしてお話いただきました。 また、コメンテーターとして工藤郁子さん（中京大学経済研究所：法学）と見上公一さん（東京大学科学技術インタープリター養成部門：科学技術社会論）をお招きしました。

ファブリケーション文化

最初に田中さんから現在のDIYバイオに影響した技術や環境、そしてカルチャーについてお話しいただきました。 バイオの研究は特に大学や企業といった限られたプレイヤーによって推進されています。 これに対し、2010年代初めからMITやハーバード大学のあるケンブリッジ市を中心にバイオの研究もオープンにするべきという考えが出てきました。 マーカス・ウォールセン著「バイオパンク　DIY科学者たちのDNAハック！」の原著が出版されたのが2011年です（日本版は2012年）。 MITメディアラボの伊藤穰一氏がBiology is next Digitalと語るように、パソコン・電子機器の世界で起こっていたことがバイオの世界でも起ころうとしています。 ……

【続きは市民研ホームページにて】

Article

新村 直子（市民研・特任研究員、医療健康ジャーナリスト）

新連載「知っ得！ ヘルスリテラシー講座」 vol.03　睡眠負債

2018年7月から隔月で新連載「知っ得！ヘルスリテラシー講座」が始まります。

この連載は、市民科学研究室の新村直子・特任研究員が、毎回専門家への取材を行い、『市民研通信』の特別連載として書きすすめます。毎回1つのキーワードを掲げ、**B5判のフルカラー6ページ**でまとめていきます。

第1回目はどなたでも全ページを以下のPDFからお読みいただけますが、第2回目以降は全ページのPDF（もしくは印刷記事）の**配信・送付は市民科学研究室会員に対してのみ**となります。毎号の記事の全文を入手されたい場合は、オンライン送金によるご購入をお願いすることになります（5部まとめて送料込300円）。

毎回、最初の「キーワード」のページは右図のように掲げます。

ぜひ多くの皆様にお読みいただければと願っております。ご意見・ご感想もお待ちしております！

第3回目は、
日本睡眠評価研究機構代表
白川修一郎(しらかわ・しゅういちろう)さん

続きは市民研ホームページにて】